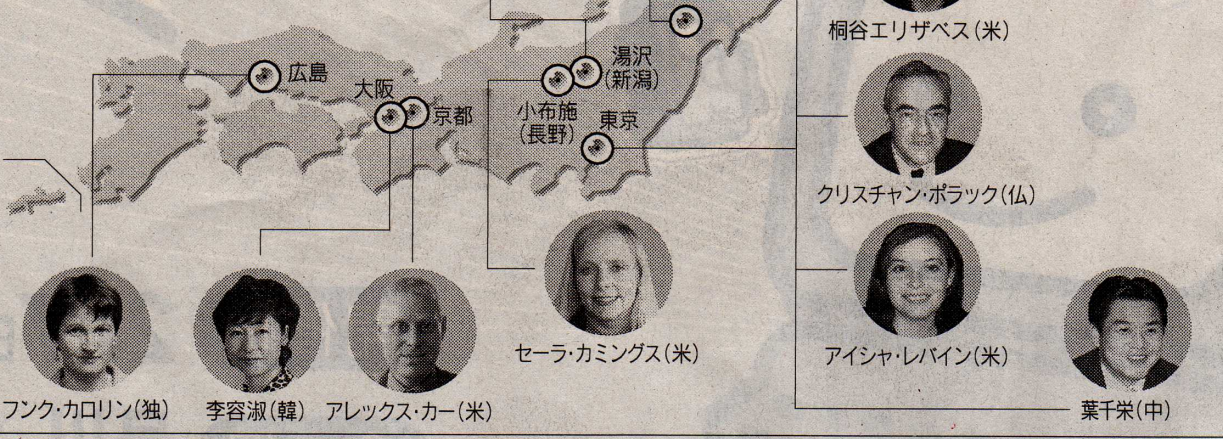
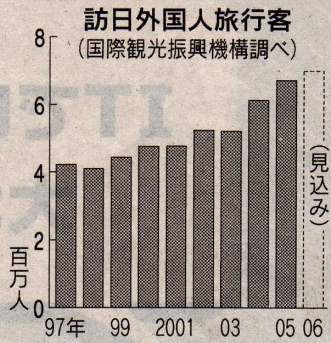


人脈 追跡

日本への外国人旅行客誘致で活躍する外国人たちとその拠点

(敬称略、人名のあとのカッコ内は出身国)



「二〇一〇年に外国人旅行客を二千万人に」を旗印に観光立国を目指す日本。外国人客は急増、昨年は七百万人を超えた模様だ。その陰には「すばらしい文化や自然を海外に伝えたい」という助っ人の活躍がある。

白銀の世界、ニセコグラン・ヒラフスキー場(北海道倶知安町)。ここで目立つのは豪州からのスキー客だ。ニセコを訪れる豪州からの旅行客は急増中。今年度は一万人を超えそうだ。

ただ一人のカリスマ。この基礎を築いたのが、ロス

文化・自然にほれ込み情報発信

・フィンドレーだ。一九八九年に来日。九一年からニセコに住み、冬はスキー、夏もラフティングなどスポーツビジネスの花を咲かせた。彼や彼のもとを訪ねた同郷の若者がロココミで魅力を伝えるうちに豪州の人が続々訪れるようになった。「ニセ

コの夏を変えた男」は全国に百人いる「観光カリスマ」に外国人でただ一人選ばれた。

豪州人向けツアーを組むのが、ディープ・パウダー・ツアー取締役のグレン・グールドینگ。「パウダー・スノーに加え、人々の日常生活を実感できる素朴な街並みが豪州の人々を引き付ける。カナダなどに比べて近く、時差も少ないのでビジネスになると思った」という。

新潟県湯沢町からインターネットで全国のスキー場情報「スノージャパン」を発信しているのが、アンドリュー・リーだ。英国の大学を卒業後、中学校で英語を教えるためにこの地を訪れたのが縁だった。発信するのは、湯沢や苗場、ニセコ、白馬、志賀高原など五百以上。「ネットで見ると日本に滑りに来る人が増えている」とほほ笑む。

政府は昨年「外国人から見た観光まちづくり懇談会」を二回にわたり開催した。委員は多士済々。長野県小布施町で街づくりに取り組む、樹一市村酒造場取締役のセーラ・カミングスもその一人だ。「木おけの文化や技を守る」運動などの仕掛け人であるカミングスは、美しい景観を残す地から様々な取り組みを日英両国語で発信し続ける。

欧米人などの間でひそかな人気となっているのが、四国の観光地・祖谷(徳島県)。「LOST JAPAN」(和書名「美しき日本の残像」という二冊の本が彼らの心をつかんだ。

農村楽しむ場を提供

著者は京都の町家を保存し、現在に活用する会社「庵」を設立したアレックス・カー。日本に居を構え三十年余。外国人が滞在し伝統文化を体験できる場を提供してきた。新たに挑むのが石川県加賀市での小集落の活性化だ。同市や民家の持ち主などと協力。外国人客などがゆっくり農村で生活体験できる「生きている村」づくりを夢見る。

カーや「日本の心でもてなす老舗旅館の女将」藤ジニーは、中小企業庁が進める「中小企業地域資源活用プログラム」のサポーターも務める。観光分野でのノウハウを期待されていることだ。

「日本で生活する外国人が日本をもっと知り、魅力を家族や知人に伝えればすそ野は広がる」と地道な活動を続けるのが、広島大助教授のフンク・カロリンや大手広告会社に勤めるアイシャ・レバイン。フンクは「日本の地中海」瀬戸内海や島の魅力を伝えることに力を入れる。レバインも京都府亀岡市の国際交流員時代に手づくりの「関西ツアー」を企画した経験を生かして、「NPOのような形で活動したい」という。

る旅行会社、リンカイ社長の李容淑は「円安もあり、自然豊かな日本の人気は高まる一方。リピーターも目立つ」という。伸びがめざましいのが中国。「市民交流を通じてリアルジャパンを伝えるべき」という東海大教授の葉千栄は「外国人客はアジア各国・地域の人が圧倒的。もっと規制緩和すれば中国からもさらに増える」と強調する。

日本の文化や自然にほれ込んだ助っ人たちが、現状を見る目は温かくも厳しい。景観や自然が壊され、魅力が失われつつある(カー)、「国内の交通費や宿泊代、入館料が高すぎる」(日仏関係史などを研究するクリスチャン・ポラック)、「外国人の旅行スタイルやニーズなどをもっと考える必要がある」(東京の下町に住むジャーナリスト、桐谷エリザベス)などだ。

「懇談会」でアドバイザーを務めた早稲田大特命教授の伊藤滋は、「外国人の視点は重要。その声を継続的にくみ上げながら、魅力づくりをすることが必要だ」と話す。

(編集委員 榎木誠)